

ソビエトの教会と修道院を管見して

「キリスト教東方正教会の総合研究」の予備調査紀行

藤 本 浄 彦

ソビエトへの契機

縁というのは本当に奇異である。私自身はソビエトのことに無知であり、たまた、ドストエーフスキイなどの文学作品に多少ふれ、大学時代に露文科の学生と話したり第二外国語の露語をのぞき見したり

の、そんな程度の関わり方しかしていない。この国の宗教思想への興味を除けば、私にとって何かしら近くて遠いようで、また、遠くて近いような国ではある。

ソビエトについてはそんな程のものしか持ち合わせていない私が、今回、清水澄先生のお伴（カバン持ち）をして「キリスト教東方正教会の総合研究」（文部省科研海外調査・水谷幸正教授代表）の予備調査に出かけた。この予備調査は、日

程的にはソビエトとフィンランドを各一週間、ギリシアを二週間、各国における修道院や教会活動そして宗教意識などを予備的に調査することである。水谷幸正教授と高橋弘次・清水澄両助教教授によって壮大で厳密な調査研究の構想がたてられ、言わば、その実現への第一歩なのである。

どこまで調査研究の目的が達成されるかの可能性に疑問を残して、われわれはソビエトでの調査を措定した。というのは、東方正教会の展開にとってこの国は無視できないし、現状はどうであれ、歴史的に重要なかなりの調査対象があることは確かだからである。そのために早くから、ソビエト・アカデミー会員や二三の研究者に訪ソの主旨と依頼状を送るけれども、待てど暮せど返事はない。全くナシのつづて。一方、この調査立案の

ときより教示を受けていた、大阪ハリストス正教会の牛丸康夫神父やお茶の水ニコライ堂の永島大司教は常に好意的で協力を惜しまれなかった。

まさに奇遇というか、牛丸神父の御尽力でモスクワのロシア正教会渉外局への紹介状とその返事を入手できたのが、九月二十四日午後、すなわち、大阪空港出発の二時間前であった。大阪空港の出発ロビーで、もう一度念のために、ロシア語に曉通な水谷先生にこの書状を読んで戴き心を強くする。現地での紹介状が大変な役割を果たしてくれるなどとはこの時には全く知るすべもなかった。

最初の一步とその印象

羽田を発ったモスクワ経由ロンドン行きの日航DC8機は、少しの疲労を感じるところ眼下にアムール川やウラル山脈を越え、九時間四十五分後、すなわち現地時間午後三時十五分にモスクワ郊外のシエレメチエヴィ空港に到着。どんよりし

た天空と湿地帯らしい地面の鈍い色とが
視界にとび込む。この国の自然と国土と
に異様な感じを持つ。今ここにこうして、
「シベリヤの遠隔な地方、曠野と山と人
跡未踏の森の間で、ときたま小さな町に
行きあうことがある。人口は千か、たか
だか二千くらい、木造のみすばらしい町
で、教会が二つ——ひとつは町の中に、
ひとつは墓地にあつて、町というよりは
モスクワ郊外の気のきいた村に似ている」
と『死の家の記録』で描写されている地
へ、自らの足を踏み入れるのだと思えば、
思わず緊張もする。

絵でよく見るような防寒服に身を固め
た無口な空港職員の間をぬって通関へと
歩きながら、「ソ連入国の際には所持品
すべて財布の底まで調べられますよ」と
か「どこでどのように監視されているか
わかりませんから注意して下さいよ」等
々、出発に先立って注告されたことばが
去来する。多少の心細さがよぎるのは事
実。入国に際しては、パスポートのほか
にビザ（入国査証）、税関申告書そして

インツーリスト（ソビエト国営旅行社）
発行のバウチャー（クーポン引換券）な
どを提示しなければならない。列をなし
て待つ日本人は、商社員らしいグルーブ
はいるが、個人的な旅行者はいない。わ
れわれは、清水先生が保管しているはず
のバウチャーを捜すが、見当たらない。さ
あ大変、一瞬、二人で大あわて。手さげ
かばんの最奥底に鎮座しますそれを見
つけたとき、ヤレヤレの思い。二人とも
かなりピリピリしていたのだ。

ところで、入国手続き検査は予想外に
簡単。むしろ、羽田出発の際の方がはる
かにきびしい。ホッとして、緊張のとけ
た顔を見合わせる。「旅行者は出発前に
は宿泊ホテル名はわからず、空港につく
と必ずインツーリストの係員が迎えて
指示してくれる」と教わって来た。が、
いくら捜してもそれらしき人物はいない。
とうとう、インツーリスト事務所へ行き
バウチャーを見せると、気の強そうな大
柄の中年婦人が「一寸待て」という。彼
女は数ヶ所に電話したあと、やっと「ホ

テル・ウクライナへ行くように」と言う。
「どこにあるのか？」と尋ねると、「そ
このタクシーで行け」と。「われわれ二
人だけでか？」「そうだ」と言う。どう
も腑におちないまま、声をかけてきた運
ちゃんに車に乗る。「いくらで行くのか
？」「二十ルーブル（八千四百円）だ」
と彼は調子良く答え、発車。約三十キロ
メートルを四十分足らずで走り、午後六
時ごろ宮殿風のそびえ立つクラシックな
ホテル・ウクライナに到着。

無事ホテルに着いたものの、あとでい
ろいろ考えてみれば、タクシーのメータ
ーに帽子がかぶせてあつたこと、そして
「空港と市内の間は、ホテルのクーポン
がある限りインツーリストの車で無料送
迎させるから、一般旅行者がタクシーを
利用することはない」とガイドブックに
出ていた。畜生ノやられた、あのタクシ
ーめ——二人して無念に思ったのは、
ずっと後のことだったが。予想していた
事柄とはどうも調子がいろいろ違う。わ
れわれは、余りに抽象的にこの国を別世

界視していたことを痛感する。

ロシア正教渉外局と 市内教会の夜の祈り

さっぱりした秋のモスクワの朝。駐ソ
日本大使館は表通りから少し入った静閑
なところに目立たずに建っている。川勝



モスクワ ロシア正教会渉外局



モスクワ市内教会での人々の参拝

二等書記官が、すでに届いている調査書類を前にして、親切に対応してくれる。牛丸師よりの紹介状の件について、直接に連絡をとってくれたお陰で、われわれはその足でロシア正教会渉外局を訪れる。住宅街に看板も掲げず何の変哲もなくたたずんでおり、建物自体は立派とはいえないが、事務所としては整っている。受

付の老人、若い僧や女子事務員の動きは静か。タイプライターの音だけがやたらと耳につく。

しばらく待って、渉外部長ヨーブ師が現われ、彼の通訳者を通して牛丸師からの紹介状を示し、われわれとしては活動している教会や修道院への見学を申し入れる。紹介状を一読の後、彼はわれわれの訪問を歓迎し希望を聞いてくれる。即座に、今夕に市内の教会で行なわれる礼拝への参加と明日のザゴルスク訪問との手続きを取ってくれる。とりわけ、ザゴルスクへの訪問が実現できることになり、バスポートを預けて依頼する。さらに、キエフの宗教局へも紹介をしてくれ、われわれは彼の好意に対して感謝の念しきり。さらに、モスクワ滞在中、ガイド兼通訳（英語）としてこの渉外局のバレンチナ・スタノバーヤ嬢？にお世話してもらうことになる。

モスクワの夕暮はネオンが輝くでなく、どんより沈み込みそうだ。『虐げられし人々』に澄み切った寒い夕方の落日のこ

とが描写されていたのを思い出す。雨あがりの五時半ごろに教会へ。市内のごくありきたりの街角にあり、三々五々に何処からともなく多くの参拝者が列をなすほどに続々集まる。黒ばいネッカチーフの老婦人たちにまぎって、カラフルな若い男女も見える。横六メートルに縦十五メートルほどの堂内は、次第に身動きできないほどになり、人々は各々に祈りとともに十字をきる。祈りの声は「フッフッ」としか聞えず、十字は親指と人さし指と中指の先を合わせて（三位一体の象徴）額から胸そして右肩から左肩へときる。堂内の左右数ヶ所に参拝者の供えるローソクの灯が揺れ、イコン（聖像画）に口づけ礼拝する老女の姿が印象的。静寂で熱気をおび、幻想的でさえある。

祭壇は重厚に荘厳され数々のイコンがまつられてある。内陣の片隅からは二十数名の老若男女の聖歌がきれいに響く。

まず、一人の司祭がクサリにつるした香炉で堂内を清めた後に、十数人の神父による儀式がはじまる。神父たちは、正教

の僧らしく鬚をのばし黒衣の者や派手な錦織衣の者など。年令もまちまちで、祈りのことばはロシア語。僧としての階級制もあるようだ。約二時間にわたる多様な儀式の間、参拝者たちは立つたままで幾度も低頭礼拝し十字をきり、司祭の持つ十字架を敬虔に頭上に戴く。老婆が喜捨箱を持って巡り、みんな喜捨している。そんな礼拝のあと、参拝者たちは一日の祈りを終え聖なるパンを受けて家路へ。

写真撮影の許しを得た私に対し、ある婦人は邪魔だから止めろといい、又、もつと前へ出て撮れと押し出してくれる人もある。しかし、イコンの前で五体投地する老婦人や熱心に祈りを続ける人々の熱い静けさの中では、シャッターの音さえ気にせざるをえない。（あの時にもつとふてぶてしくカメラを構えれば、多くの良い資料を得たのに思うが）。ドストエーフスキイが、ゾシマ長老をして「ロシアの救いは民衆にある。しかるに、ロシアの僧院は昔から民衆の道づれであった」と言わしめた一文が想起される。

これら参拝の民衆は、一体いかなる意識なのか？どのような日常生活を営んでいるのか？など思いが走る。残念ながら、彼らに直接通じるほどの会話ができない。はがゆい。

バレンチナ嬢の話によれば、人々は自らの一日の仕事のあとの時間を自らの自由のもとで教会に参拝する。そして、礼拝の対象であるイコンを各自が持つか否かまでは立ち入って解しえないという。

彼女自身は持っており、信仰者の一人であると言明した。われわれは彼女との対話の中から、いろいろなことを聞き出す。うとするが、決定的な答は帰ってこない。それにしても、教会で礼拝する人々の熱い目々そしてあの静けさとおごそかな雰囲気。ザゴルスク行きが楽しみになった。

赤の広場にて

こんなに自由にぶらぶら歩きまわって良いのだろうか……と思うほどに、午後一のひとときを二人で赤の広場へ。広場へ

の入口、人々の出入りで大変な混雑をしている国営グム百貨店のところで、立売のお婆さんからアイスクリームを買う。

こんなに美味でコクのあるクリームははじめて。この売上げはどこに入るのだろうか？個人収入か？など話しながら、クリームをなめながら石畳を登ると、とてもなく広い場に呑み込まれる如き。広



モスクワ 雨あがりの赤の広場

さ七万三千平方メートルあるという広場にたたずんで、向うにあるクレムリンの城壁を眺める時、私にはソビエトの大きなというよりは人間の小ささが感じられた。それほどに威圧的なところがある。確かにこの広場の数多くの歴史を知るときに、われわれの心の中には何か厳肅なものが投げかけられる。

それとは裏腹に、ここはモスクワの一つの観光地としても異なった華やかさがあるようだ。シーズンオフなのに観光の人々が多く、地方の片田舎から来たような人も見受る。そんな中で、唯二人の日本人として、われわれは少なからず遠慮気味ではあった。カメラを持つ人が少ないこと、したがって、撮影することに気遅れせざるをえない。

赤の広場の中央、クレムリンの城壁を背にしてレーニン廟がある。ウクライナ産の暗赤色の花崗岩作り。スマートな制服の番兵が、身じろぎもせずにレーニンの棺を守っており、人々は老若男女を問わず静かに棺の横を通っていく。日曜日

や休日には、参拝の人々で長蛇の列ができるという。まさにここが一番ソビエト的な拠点と言えよう。

レーニン廟に向って右方に歴史博物館、左方に聖ヴァシリイ寺院からモスクワ川へと通じる。赤の広場とクレムリン宮殿には多くの寺院があるが、今はすべて歴史的物品陳列所であるにすぎない。ともあれ、城壁の上に立っている二十の塔、とりわけ大時計とルビーをちりばめた赤い星をつけたスパスカヤ塔を中心に、モスクワ川畔の丘陵地の一角がこうしてクレムリン宮殿と赤の広場で象徴されている。

折悪しく雪がちらつきはじめ、急に寒くなってきた。横なぐりの雪の中、われわれはあわててホテルに帰り、暖をとる。雪の赤の広場も良いものだ――。

宗教府、ザゴルスクの一日

九月二十七日朝十時、バレンチナ嬢と彼女の友人の運転する車で、モスクワか

ら北東約七十キロメートルにあるザゴルスクへ。近代的な高層ビルと立体交差の市内から一步出ると、農村風景が開ける。長い白樺林をつきつて湿地帯を車は走



ザゴルスク
アカデミーとアイコン博物館入口にて
清水澄先生

る。急にスピードを落すので尋ねると、ここでは自動カメラでスピード検問を行なっているからとか。いずこも同じことだな——と溜息。林のふもとにひっそり

と墓地や教会が点在し、地平線に带状に森が続く。放牧地や丘の上の集落などを眺めているうちに、市街地に入る。われわれ異国人を乗せているせいか、一度検問に会うが難なく通過。十一時半ごろソビエト唯一の宗教府ザゴルスクに到着。

ここは、ロシア正教の本山で六百年前に建てられたトロイツェ・セルギイ修道院を中心に宗教の町を形成している。教会、修道院、神学校そして博物館などが整っており、ゆつたりした構内には、参拝者や僧職者そして神学生たちがのどかに歩いている。ここがソビエトの一角だろうか？と疑いたくもなる。

まず信者参拝の教会へ、丁度礼拝の儀式中。日本の仏教者の僧衣以上に派手な荘厳衣の神父たち数人の儀式と堂内にあふれるばかりの参拝者の顔々々。神父の低音の祈りと参拝者の祈り、そして聖歌とが響きわたる。私の気のせいであろうか、神父たちの権威的形式的な態度と参拝者の祈りの素朴な表情とが対照的にさえ映る。一方、隣りの小さな礼拝所では、

アイコンに供える無数のローソクの灯に照し出されて、五体投地の礼拝やアイコンへの接吻の姿々々。静けさの中、神への祈りの神秘世界がここに生きている。この国における宗教の素顔を見た思いがする。

一步外に出ると初秋の日ざしがねぎ坊主型の塔にギラギラ光っている。信者の出入りは驚くほど多い。また、彼らはここそこに数人で寄っては話をしている。ごく自然な光景ではある。この主教会の塔はクレムリンのそれより七メートル高い、と誇らしげに話してくれた案内人の顔が印象的。

ここザゴルスクには正教のアカデミー（他はレニングラード）とセミナリー（他はレニングラードとオデッサ）とがあり、また有名なアイコン博物館がある。このセミナリーの副校長というH・ゲオルゲ神父の案内で博物館へ。歴代の主教の遺品や数多くのアイコンが所せましとばかりに数多く陳列され、また革命前の教会や修道院の模型など。十四世紀前半から信仰の対象として秘めたるものであったろう

立派なアイコンを見ながら、美術的なことに暗い自分に自分で歯ざりりする。とりわけ、中にイエスの復活が描かれている卵形の玉（ガラスや水晶製）はめずらしい。これを信者はシンボルとして持ち歩いたという。

一方、セミナリーには三六〇人の生徒が、寮生活をしており、カリキュラムの中には歴史の領域としてイスラム教や仏教も入っている。しかし、彼らは、ギリシアにはじまる正教への学問的歴史的な関わりとか、宗教としての教義や理論などを学ぶのではなくて、むしろ単に儀式的実践を中心にして、決してこの国の政治的体制には触れないのであろう。ただ、このアカデミーの教会で、多分生徒たちと参拝者のものであろう数多くの「告白録」らしいものが見られたとき、新たなもう一つの興味がわいてきたことは事実。思いもかけず、美味なるスープと魚とこの修道院で作っているという野菜などの昼食をごちそうになり、聖なるワインも喉をうるおし、折角だから仏教者との

対談をしようという神父の発案によって、約一時間談論する。通訳を媒介にしてのやりとりなので決定的なことは言えないが、①ロシア正教の最良のガイダンスは聖書である。②三位一体論が教えの中心である。③口で称えることばは何と称えているのか明確でない（多分、自らの信仰告白を口にするのであろう）④ギリシ



ザゴルスクアイコン博物館にて
バレンチナ嬢 神父 清水澄先生

ア正教の聖地アトスを知らず、心の祈りがわからず、ギリシア語が解せない。⑤他国の正教僧や信者との接触が少ない。いわんや仏教徒との出会いはいうまでもない。⑥コミュニストとの関係はほとんどない——というような状況だと思われる。おいしい食事にホッと一息つき、温厚そうなゲオルゲ神父の見送りを受けて、ザゴルスクをあとにする。

キエフの教会と修道院

バレンチナ嬢の手厚い見送りと「ウヴ イージエムサ（また会いましょう）」の声を背に、モスクワ郊外ヴンコーボ空港から、戦闘型のアエロフロート機で約一時間半ほどでソビエトの穀倉地ウクライナ地方の中心都市、キエフへ。ここは南国の感じ。インツェリスストのおばちゃんを迎えを受け、不安ながらに指示に従う。待つ身の複雑な思い。やっと一人の若い男とともに空港の通用門から車で出発。一直線に走る大道、並木は紅葉している。



キエフの尼僧修道院にて
ピエチニク師 リューバ嬢 清水澄先生

大きなドニエプル川の向うに教会が見え、とても豊かな緑々々。だが、われわれは一体どこへ連れて行かれていたのか——不安。一度ホテルを間違えて、その無口な運転手の苦笑いを見ながら、四時半ごろホテル・リビド着。空は快晴、緑が多い。街も明るくおおらかな感じ。

小休息のあと、キエフ・ガレリア総主

教事務局へ行く。所在地は、プーシキンヤーナ36。紹介状とともに、われわれの意向を伝える。突然の訪問だからであろうか、何かしら冷たい。おもわず警戒心を起させるような雰囲気。とにかく「インタープリター（通訳者）をつれて明日来い」との指示。出直すことにする。それにしても、モスクワとちがって、少なからずいろいろ考えさせられること多し。朝十時に通訳のルーバ嬢とともに昨日の総主教事務局を訪れる。数人の老人が参拝し椅子に座って待っている。彼らには何か信仰の相談をしているような表情がある。「正教会」という教会月刊誌の編集長ピエチニク師と会談する。彼の説明によると、キエフには十一の教会と二つの修道院があり、ウクライナ地方全体では四千の教会と五千人の僧侶がいるという。そして月刊誌は一万人の信者に配布しているとか。彼はそれ以上に説明しようとしないうし、こちらも聞き出せない。親切なことに、彼は車をチャーターして、われわれの希望通りに市内の一教会と二

修道院へ案内してくれる。——ここでも牛丸師のあの紹介状が威力を発揮している。

まず、聖ラディマル教会へ。この教会は市内中心部の閑静な通りに面しており、参拝者は自由に堂内での祈りに参加する。昨夜この前を通ったときに、出入りする人の多いのに注目していた所。昼の陽光は底ぬけに明るく蔭が濃い。一步堂内に入ると多くの参拝者、とりわけ五体投地の札拝やアイコンの口づけの仕草が、信者の信仰の深さを物語っている。祈ることばは、聖書のことばか「神」を口に称える。参拝者の服装は、モスクワのそれに比して解放的で裕福そうにみえる。参拝者は堂の入口で低頭し十字をきり、帰りぎわにも同じように丁寧な動作——田舎のお寺に参るお婆さんの仕草を思い出す。残念ながら彼らの意識を聞き出すことができない。

次に、街はずれの公園地帯にある尼僧修道院を訪ねる。二百人の修道尼がおり、かつて日本女性も一人いたという。静か

で整った貴重な修道院のようで、数人の老尼が堂内の掃除をしていたが、若い人はほとんどいない。ここでの修行の内容や僧尼の生活や意識などに直接ふれえなかったのは、かえすがえすも残念ではある。

第二次世界大戦の初めにキエフはドイツ軍に占領され破壊された。その後遺症でもあろう市街貧民地区のプロスキー修道院に寄る。狭い教会だが、十五世紀の建築で美術的には貴重であろう。百人の修道僧が生活しており、朝夕の祈りはさかんだというが、僧の姿は全く見えず。われわれに乞食する数人の老人が目に入ったとき、何とも言えぬ奇異な感じを抱かずにはおれなかった。しかし、場所的に見て、この修道院はかなり地域的な役割を果しているようだ。ゾシマ長老の教訓に「悲しいかな、事実、僧侶仲間には多くの徒食者や傲慢な無頼漢が交じっている。世間の教養ある人々はこの事実を指さして『おまえたちはなまけ者だ、無益な社会の穀つぶしだ、他人の労苦で生

きていく恥知らずのこじきだ』と言う。(略)われわ僧侶の中からは昔より、人民のために活動した人が多く出ている。今とてもそういう人がいないはずはない。同じように謙虚温順なる禁欲と沈黙の行



キエフ

プロスキー修道院

者が、奮然と起って偉大なる事業におもむくであろう」とあったのを想い出させられる。

ピエチニク師は「もつと訪れたいところはないのか」と言う。最後に、かの有名なウラジミールの丘へ。快い日ざしのもと公園を歩いていると突然、孫をつれた老婆が「ヤボーニヤ、ヤボーニヤ」と親しみの笑顔でやって来て握手。笑顔のきれいなこと。親日家もいるものだな—と思いつながら、カスターニエンの並木を歩く。九八三年にはじめてキリスト教をこの地に伝えたウラジミールの銅像(全高二十メートル 立像四・五メートル)を右手下にして、ドニエプル川の大きくゆつたりした蛇行と対岸の緑と空の青さの眺めは圧巻。外国人観光客が多い。もうこれ以上に案内してもらうのは恐縮のいたりで、その旨を師に述べると、わざわざホテルまで送ってくれた。——一体、われわれは歓迎される客なのか、はたまた歓迎されざる客だったのか?

キエフの街にて

この街は起伏に富み緑が多い。道路は

広く中央分離帯は並木の歩道になっており、放射線状にのびている。市電とトロリーバスと地下鉄が整っている。ホテルのプレイガイドで夜の歌劇鑑賞の券を求め、二人して洒落こむ。片道料金が四コペイカ（約二十円）でトロリーに乗り、捜しに捜して最後にはとうとう中年の婦人に連れていってもらう。大きく立派な



キエフの街

オペラハウス。女性の色とりどりの衣裳や若い二人づれなど、華々しく派手な社交場といった感じ。その雰囲気は、ソビエトであることを全く忘れさせるほど。

出し物は「西から来た少女」という西部劇まがいのもの。一番前の席で、オーケストラの迫力とアリアの音量とに堪能する。九時すぎに会場を出て、永く続く高いボブラ並木の道をホテルまで歩く。並木の向うに見え隠れする月。今日は仲秋の満月だ。ウクライナの月を眺め、多少感傷にしたる。——この国での旅に心理的な余裕が出たからか。

モスクワの街は少なからず冷たさを感じたが、ここキエフは全くちがう。ホテルの隣の百貨店をぶらぶらする。勿論、陳列に装飾はない。日本と同様にほとんど全ての商品がある。衣料品売場がとくに混雑しているが、値段は例えば、十六インチの白黒テレビが三八ルーブル（約十五万五千円）、電気鬚そり機十一ルーブル（約四千二百円）など、靴類は高そう。生活必需品は安く、いわゆる贅



キエフの公園にて

沢品が高いらしい。人々に混じって買物をする異和感は皆無。値札の金額を先ず支払って、その領収書と交換に品物を渡してもらおう。店員は中年の婦人が多くて親切。日本のように若い女性はいない。アイコンの類も売られているのが目にとまったとき、われわれはこの国の人々の宗教的な素顔を見た思いがした。

メインストリートでも露店商が多い。キャビアをまぶしたクリーム付のパンを四コペイカ（約二十円）で買い、食べながら歩く。おいしい。果物商は、子供の頭ぐらいの西瓜を山ほど積んでいる。下の方はもう割れて、大きなタネと水分とでビショビショ。こんな光景をよく見かけた。市電は三コペイカ（約十五円）、乗り込んで小銭がなくて困っていると、前に座っていたおばさんが切符をくれる。思わず、「スパシーボ（ありがとう）！」と声に出る。

レニングラードの博物館

キエフの陽気さを後にして、われわれはずっと北の都市レニングラードへ。飛行時間は約一時間半。空港で、シベリア鉄道からサマルカンド経由で旅して来たという日本人観光者八人に会う。近代的な施設の小さいな空港。気になるようなチェックはない。肌寒く小雨の空。この街はネヴァ川に抱かれるように位置し、

落ちついた風情。インツォリストに導かれてホテル・モスクワへ。巨大な壁のごとく大きなホテル。ロビーや食堂は西側からの団体旅行者たちであふれている。

その団体客たちのにぎやかな宴会を後目に、食事の注文をするが、われわれ二人の日本人は全く無視されている。大いに不愉快なり。ここはもう全く西側の雰囲気。ひっそりと二人でソビエト最後の晩餐会、料理はおいしい。しめて二人で二十五ルーブル（約一万円）なり。

「宗教史・無宗教史博物館」は、列をなして入るほどである。クロークのおじいさんが、面口臭そうにわれわれの持ち物を預り、本当に面口臭そうにジロツと上から下まで見やり、奥へ入れというようだ。陳列品は、宗教風刺、イコン、聖者像、鉄製の十字架の首かけや胴巻など、いわゆる宗教的諸道具に至るまで。それらすべてが、単なる歴史的物品ないしは宗教批判の素材として展示されている。入館者はみんな驚くほど静か。この国では、寺院と名のつくものはほとんどここ

のように、歴史博物館なのだ。宗教も単なる過去のものとしてしか位置づけられていないということ。

第二次世界大戦では足かけ四年間ドイツ軍に包囲されたというが、雨あがりのレニングラードは北国らしく窓の小さい重々しいコンクリートの家並。街路樹は少ないが、公園が多い。若者が来て、ソビエト通貨をドルに換えてくれとせがむ。この街は、どう考えても、西側世界との重要な接点であり、その意味で複雑なところがあるなあ—と思われる。

ホテル・地下鉄・飛行機

われわれは、モスクワで三泊とキエフで二泊そしてレニングラードで一泊した。モスクワのホテル・ウクライナは気品があり、キエフのリビドは庶民的、レニングラードのホテル・モスクワは資本主義国的なモダンさがあり、それぞれ個性的。一般にソビエト旅行は、最初に宿泊するホテルのインツォリスト事務所で、バ

ウチャーとビザ照合のもとでこの国での行程がすべて手続きされる。つまり、ツリーリストカードとクーポン券と国内航空券とを手渡ししてくれる。この国での旅行者にとっては、これらのカードが一番大事。食事はバイキング式の朝食つきで、空港からホテルまでの往復はインツーストマかせ。合理的といえそうだが、何かしら監視されているようで、思わず警戒もする。

どのホテルも各階の入口に、部屋のキーを管理する女性が無表情に座っており、部屋の出入りに際しては必ずこの係の前を通らねばならず、いわば宿泊者監視人だ。ホテル、ウクライナのその係に、持ち合わせていた小さな西陣のガマ口をブレゼントしたら、とても喜び、表情を崩して笑顔を作ってくれた。

どのホテルにも一階に大きな食堂とベリヨースカ（外貨専門店）があり、いわば外国人とガイドなど特定者のみの世界がある。食堂は夜の深まりとともにエレキ演奏やダンスなどにぎわう。また、

時には一般の人々には入手できない商品をベリヨースカで旅行者に買ってもらうというような手合も生じるとか。とくに食堂での騒ぎ方は、ソビエトという国での異国的風景である。

料理の量は多いが、盛りつけは全く雑でお世辞にもおいしくはない。ニワトリ用のきざみ野菜を連想する。肉はポリウムはあるが、キエフを除いては良くない。魚は生では食べられず、お味。ロシア料理を注文したら、「量が多く、また、あなた方には食べられません」とボーイに注告され、食べずじまい。コーヒ

ーは、質の悪い固形砂糖をかじりながら飲む。この飲み方もおいしい。ワインは口あたりは良いが水くさい。ウオッカを飲んでいる人がやはり多い。少し飲むにはとても美味だが、多くてもカップ一杯ぐらいしか飲めないくらいにアルコール度が強い。水の代りにウクライナ・ナピートウクという果汁水を飲んでる。

青色のMマークが地下鉄（メトロ）。残念ながら、モスクワでは乗らずじまい。

キエフのそれは市内と郊外とを結ぶ幹線のようだ。日本のと同じような仕組みだが、全区間五ペイカ（約二十五円）のコインを入れると自動的に改札される。改札口には必ず係のおばさんがおり、世話してくれる。そのおばさんに駅名や方向を尋ねるが通じず、とうとう警官を呼んできて親切に教えてくれる。乗降客の流れは速い。モタモタしキョロキョロしているのはわれわれのみ。

キエフのメトロはそう深いところにはないが、レニングラードのは長い長いエスカレーターを下りた深底を走っている。ここのは、ホームの壁に乗降用のドアがあり、電車が入ってくると電車のドアとホームのドアが同時に開く。したがって電車が来ないときには、ホームは地下道の状態、すなわち防空道になる。地下深いところにあるので、このような構造の地下鉄ホームは緊急の場合に有効である。また、ホームは駅によって色が異なり明るいモザイクのデザインである。駅それぞれに個性的なしつらえがしてあ

る。すでに噂で聞いてはいたが、成程いろいろ工夫があり、人々はマナーも良く非常に軽快な印象を与える。

われわれの旅程の移動は、ソビエト国内航空のアエロフロート機で、尾翼にジェットをついたスマートな戦闘型。お世辞にもきれいとはいえない機内と冷たい感じのスチュワード（日航のスチュワードスのやさしさを再認識）と左右上下に揺れる荒ばい操縦。他国の国際線のように、機内には華やいだくつろいだ雰囲気はない。国内線の機内飲料はプラスチックのカップについだ水のみ。レニングラードからヘルシンキへの機内（国際線）ではワインだった。

キエフへの機内ではカナダの旅行団、キエフからの機内は買出しから帰るような大きな荷物を精一杯多くさげた人々など。

レニングラードの空港で三十分をドルに交換するときの困難さには閉口。出国手続きは、入国の際の申告カードと出国のそれとを照合して提示し、ビザをはぎ取られいよいよ荷物の検査。これが

うるさい。清水先生はトランクを、私はシヨルダーバッグをそれぞれ開けられ検査される。女性検査官が注意深く点検、無事パス。次に身体所持検査。女性検査官の前で検査機ゲートをくぐる。非常に感度が良い。コイン、メガネやベルトの金具、タバコでも持っていないなら、ピーと鳴る。ピーと鳴るたびに待っている人々とすでにパスした人々とが共に励まし合う。われわれも、それぞれ三回トライして無事通過、思わずまわりから「ハラシヨ（良い！）」と声がかかる。変なところで乗客同志の仲間意識が生じる。一方、女性検査官はニヤニヤしているのみ。出国にあたって、たわいなくも心なごむ一時ではあるが――。

おわりに

短期間のソビエト調査旅行、しかも細い管を通して片目で見えるようなことであるから、私自身の主観も多く入った紀行文になってしまった。モスクワ市内の近

代的都市整備と郊外へ広がる高層住居群、そして威厳をもってそびえるモスクワ大学などの中で、生き続けている市内教会やザゴルスクの人々の宗教的な熱い態度。さらに対照的なキエフの自然と人間、ここでは、親しみ深いこの国の人情と素朴な宗教意識が感じとられる。小さな島国の日本の物差でみると、何を取り出してみても大国的であり底が深く果てしない広がりを感じざるを得ない。良い意味で不思議な、魅力的な国ではある。そしてわからないことが多すぎるのだ。

ドストエーフスキイが彼の創作ノートで語っている。「信仰薄き人々が、救いは僧侶より生ずるものではない。救いは寺院から出ずるものではない」といっているのは果して真実であるか？或いは真実であるかも知れない。恐るべきはこの一事である。」と。恐るべきはこの一事である。との強烈な問い。ここにこの国の伝統を看取すべきなのであろうし、われわれの調査研究においてもそうなのだ。

（ふじもと きよひこ 文学部助教）